

# 富士山宝永大噴火で埋まった 約300年前の皆瀬川村の村況絵図 (現在の神奈川県足柄上郡山北町皆瀬川地区)

## (1) 絵図の作成年代

絵図の右下に「此通岩手藤左衛門殿へ差上申候申六月十八日」と記されている。宛先の岩手藤左衛門は、1727年(享保12年)から1732年(享保17年)まで足柄地域を支配した代官であるため、この「申(サル)」の年は、1728年(享保13年)と特定できる。作成年次の横には、東西一里(約4km)、南北弍里余(約8km余)と、この絵図の範囲が記されている。

## (2) 絵図の作成目的

絵図作成の2年前にあたる170年(宝永4年)11月23日から12月8日(旧暦)までの16日間をわたり、富士山は有史来最大といわれる大噴火を起こす。現在の神奈川県一帯に、噴火の「降り砂」が積もるが、皆瀬川村は、約70cmの「降り砂」に覆われ、絵図に見られるとおり2年後になっても、山々は深い砂で覆い尽くされていた。皆瀬川村のみならず、当時の小田原藩(現在の小田原市、南足柄市を含む神奈川県西部一帯)のほぼ全域が、この時期天領に支配替えとなった。現代流に言えば、長期の「激甚災害」指定である。このため、幕府が派遣した代官が村々の現状を把握するため、絵図とともに村鏡帳(村況報告書)の提出を求めたのである。

## (3) 皆瀬川村の沿革と景況

皆瀬川村は、現在、神奈川県足柄上郡山北町の行政区の一つで、2009年5月現在8軒、218人が居住する山あいの小さな集落である。

絵図作成の前年の1727年(享保12年)の村鏡帳によると家数は80軒とほぼ変わらないが、人口は532人いたという。

山北町の中心部(御殿場線山北駅周辺)に繋がる南側を除く三方を、約150~400m級の山々に囲まれ、その中央部を皆瀬川が北から南へ貫流する。傾斜台地を階段状に開懇した山畑が主体で、たんぼは皆瀬川沿いの低地部に分散していた。農地に恵まれない分、「薪・萱売り」や「炭焼き」「煙草栽培」、和紙の原料である「楮(こうぞ)栽培」などの農閑稼ぎで生活の補填をしていた。

集落は、「八町(はっちょう)、人遠(ひととお)、湯ヶ沢、高杉、市間(いちま)、中尾、深沢、鍛冶屋敷、(本村)」にあったが、本絵図

に「人遠」の記載はない。狭い集落に寄り沿うように「宮」が10、「堂」が4つ建てられているのがわかる。村の鎮守は、絵図西側の高杉にある「大神宮」である。

## (4) 絵図から読み取れる1728年(享保13年)の状況

### 「山畑」は降り砂で全滅

まず目につくのが黒色で塗りつぶされた「山畑砂」の表記である。黒砂が積もったままで麦などの作物が皆無であることを示している。山畑に積もった「降り砂」を排除しても、次の雨で上の山からまた砂が押し流されてくる。

### 皆瀬川は厚い土砂でせき止められ低地の耕作も不能に

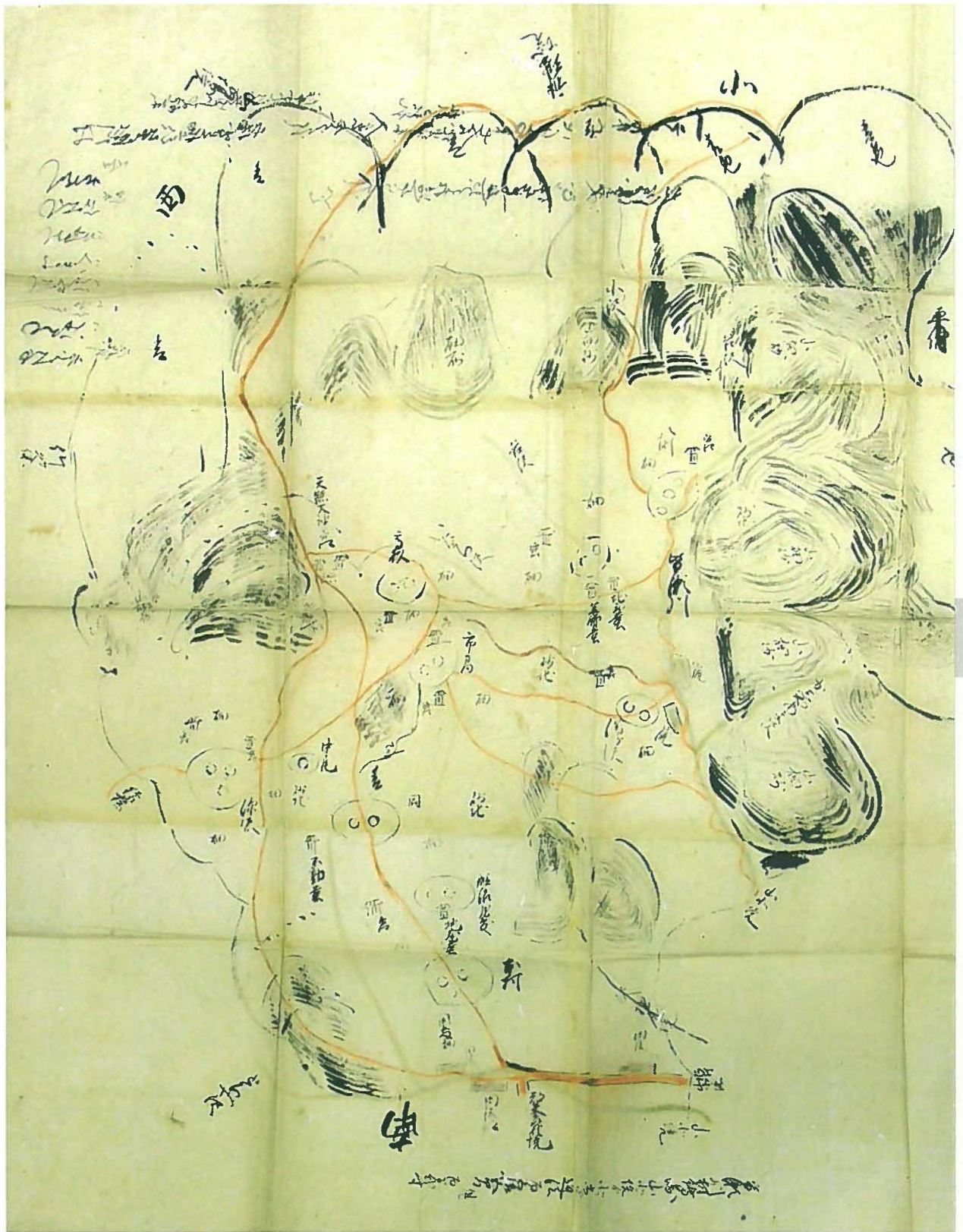
富士山噴火の4年前、1703年(元禄16年)M8.2の小田原大地震がこの地を襲っている。この時、皆瀬川村では、総家数58軒の88%に相当する51軒の家が潰れた。村の三方が、山崩れで軟弱になったままの地盤の上に富士山の噴火砂が積もったわけである。絵図からは読み取りにくいですが、雨のたびに大小多数の沢筋や両脇の山々から崩れおちてくる土砂と厚く堆積した噴火砂が皆瀬川本流に入り混じって天然のダムを作った。満水になれば破堤し下部をいっきに壊滅させた。

### 村に残るも地獄、出るも地獄

河床が沓丈式尺位(約3.9m)になったというから、絵図南側の「田流」も容易に想像出来よう。

近くに「開発所」の記載があるから、必死に新しいたんぼ地の開発に努めたようである。このような状態だから年貢は免除されていたが、自力復旧は進まなかった。噴火翌年の1704年(宝永5年)1月には、皆瀬川村は559人分(1人当たり米1合を1日分)の飢人扶持米(きんにふちまい)の支給を受けている。それも永くは期待出来ず、村では体力の無い者から餓死に追い込まれ、体力のある者は小田原、沼津などへ出稼ぎや奉公に出て行った。この絵図は、元禄の小田原大地震と富士山噴火砂の後遺症からの復旧が進まず、村に残るも地獄、出て行くのも地獄の激甚災害地・皆瀬川村の姿を現在に伝える貴重な史料である。

大脇 良夫(「足柄の歴史再発見クラブ」顧問)



「皆瀬川村絵図」 (井上家文書) 神奈川県立公文書館蔵



## 絵図から約200年後、関東大震災後の大雨で皆瀬川は再び土砂に埋まる

1889年（明治22年）皆瀬川村は、隣村の都夫良野村（つぶらのむら）と合併し共和村（きょうわむら）となった。

1923年（大正12年）関東大震災（M7.9）で皆瀬川は再び大量の土砂で埋まる。

大地震3年後の1926年に共和村から出された「皆瀬川砂防工事嘆願書」から被害の概要をピックアップする。（『山北町史』史料編・近代の第272史料を基に筆者が抜粋・編集した）

1923年（大正12年）9月1日、関東大地震発生。あちこちで斜面大崩壊。9月15日、地震で軟弱になった皆瀬川の山林・山野が大雨で崩れ泥状の大洪水で田畑・道路全部埋没。村全体が赤土で覆われた河原状になり未曾有の大変異。

1924年（大正13年）1月15日、最大の余震（震源は丹沢でM7.3）で前年崩れ残った斜面も滑落崩壊。8月、2度目の大洪水。それでも村民は必死に復旧に尽力。

1925年（大正14年）8月、3度目の大洪水。「其の惨害、前年に幾倍ナルヲ知ラズ、サスガニ村民天ヲ恨ミ地ヲ呪ヒテ、落胆失望其の極ニ達シ、遂ニ他村ニ移住セントスル者続出スルニ至ル」（原文の一部を引用）とあり、救済の嘆願をしたものである。

＜大地震+その後の大雨で大土砂災害が繰り返されている＞ことを肝に銘ずべきである。



現在の皆瀬川 深沢集落の風景

「深沢」からひと山向こうが「市間」の集落で、集落どうしの交流には山越えが必要である。「深沢」から「八町」の集落に行くには、3つの山越えを伴う厳しい環境であるが、人々の絆は深い。緑で囲まれ空気清浄、夜は満天の星空で自然の恵みであふれている。激甚災害地の傷跡は、一見した位ではうかがいにくい。

